

鉄線花





夫・明とスイスへ旅行した折、マッターホルンを背に（1992年7月）

挿画——田村眞生子
装丁——田村義希

はじめに 田村真生子

1

I

二〇一〇—二〇一九年 二五〇句

13

II

夫を送りて

79

「偲ぶ会」を終えて 81 / あかねさんの花瓶 82 / 埋骨式 83 / 八十歳の
誕生祝い 84 / 夫の蔵書 86 / この一年 87 / 田村明さんの背骨 88 /
田村明まちづくり賞 90

伊豆の折々

91

四月の伊豆 93 / 『草平君の選んだ学校——愛真高校 日誌』 94 / 手織
りのマイ・コート 95 / クリスマス・コンサート 96 / 分かち合う心 98
/ 『キッチンが走る』 99 / 心の健康体操 101 / 手織りのテーブル掛け 102
/ 不思議なご縁の藍染めのコート 103 / 生かされる 104 / 桜の花芽 106 /
『あすという日』 107 / 『描かれた富士』展 108 / あけぼの句会 109

7

めぐり会いし人びと

111

八十一歳の誕生日 113 / 武川守成先生 114 / 『白の画布』 115 / おかあさ
まのようなお友だち 117 / 手描きのうちわ 118 / 若き音楽家の誕生 119
/ 成人式の真生ちゃん 121 / お手製の苺ジャム 122 / 幸子さん！ 123 / 桂
武ご夫妻 125

6

『枝垂桜』その後

思いがけない反響¹²⁹／『熊のプーさん』誕生のエピソード¹³⁰／ポーランド語の手紙¹³¹／フランクフルトの京子さん¹³²

127

家族とのこと

金子みすゞの詩¹³⁷／あどけない顔¹³⁸／行く年¹⁴¹／オランジュリー美術館のモネの部屋¹⁴²／『齋藤宗次郎・孫佳與子との往復書簡』の出版¹⁴⁴／遺していただいたもの¹⁴⁷／『今、田村明を読む』¹⁴⁹／地の塩¹⁵¹／「我汝らを世よりえらびたり」¹⁵²／浜辺の歌¹⁵⁴／八十八歳の誕生日を迎えて¹⁵⁵

135

田村眞生子 略歴

158

句文集 鉄線花

田村眞生子

バルビゾンのミレーのアトリエを出て

昏れ初むるミレーの垣根鉄線花

夕闇にひかる一輪白鉄線

「偲ぶ会」を終えて

(二〇一〇)

花 筏 お 別 れ で な く 送 る 会 眞生子

四月三日、「田村明さんを偲びお別れする会」が、横浜馬車道のヨコハマ創造都市センターで開かれた。三階のホール正面には、大きな遺影が花の中に飾られ、献花をしていただけのようになっていた。

田村の好きだった讚美歌で始まった第一部では、友人の成澤光なるさわあきら氏が、「田村明さんの背骨」と題してその本質を語ってください、つづいて私も「思い出」をお話した。第二部は、関係深い方がたが田村についてお話してください、一階ではお酒もふるまわれて歓談を、地階では田村の著作やスケッチブックを見ながら各地での講演を聴く、という独特のスタイルだった。

第一部のあとに全員が集い、神奈川県知事の音頭で、ワインで乾杯。横浜市長もかけて、田村の横浜市の都市づくりへの貢献に感謝の辞を述べてくださった。

北海道から九州まで、思いを超えた五百人もの方がたが田村を偲び、心のこもった見送り（「さよなら」でなく送る会）をしてくださったこと、そしてこれほどのすばらしい会を企画準備し、成し遂げてくださった実行委員会のみなさまに、何と申し上げてよいかわからないほど、感謝の気持ちでいっぱいである。

あかねさんの花瓶

(二〇一〇)

夫が亡くなったとき、みなさんに何を記念にさし上げようか、それはもう決まっていた。夫が愛用していた冷酒用のグラス。底がどっしりと厚い丸味のある三角で、少しひねりながら開いていく。和食の夕食には、夫は必ずこのグラスで美味しそうに冷酒をいただいた。ではお酒を飲まない方や女性には？ 西穂高にあるこの作家のガラス工房に電話をする

と、奥さまの松浦あかねさんが彼女の作品の写真をすぐ送ってくださいました。透き通ったリングのようなガラスの中に、グリーンやブルーのハートに似た形が水の入る部分に溶け込んでいる、何とも魅力的な花瓶である。厚さはあまりなく、前面と後面はスパッと切り立っているが柔らかな重量感があって置き物としても楽しめそう。

お送りした方からは「魅せられた」「窓辺に置いて、天からの希望の光をたのしみたい」など、大満足のお返事。中でも心に残ったのは、偲ぶ会で特にお世話になったデザイナー・町口忠さんの詩であった。

……晩、帰宅、ひとり、物干台……。晴、曇、雲、雨、雪。空を見る、見上げる、見えない……。

きょう、安曇野、あかねさん、光に満ちた COBALTBBLUE 蒼穹。HEART なーあんだ。夜でなくとも、朝昼晩、いつでもどこでも田村はここに……いる。見守っているゾ……と。宙をジーンと見上げる。また、又、亦。先達、田村明さんに励まされちゃった……。

埋骨式

(二〇一〇)

六月六日二時より、小田急線「生田」の「春秋苑」で、亡夫田村明の埋骨を行った。明の兄弟と、その子どもや孫たちが参列、成澤光さまには最後までお付き合いただいた。

梅雨前の陽ざしの強い日だったが、「雲の柱、火の柱」へ出エジプト記 13章22節と、父幸太郎が刻んだ墓碑の田村家のお墓に、すでに眠る父や母の傍ら、明も安置された。

私は明が、み許しのゆえに神様の下に受け入れていただくことを乞い祈り、私の至らなさ、特に明の子孫を産んであげられなかった申しわけなさを、明にも姑にも心からお詫びをした。弟も姉もその子どもたちも祈ってくれ、最後に成澤さまが、田村家のため、これからの若い人たちへの祝福を祈ってくださいました。神様はそれぞれにいろいろな道や試練を与えられるが、すべては神の御手の中に在ることを感謝した。

夫の遺骨が書斎から消えて急に寂しくなった。遺言書に「私の半生を愛情をもって最後まで支えてくれた妻眞生子に深く感謝し……。私亡き後も意味のある人生を楽しく送ってください」とあったのを思い出し、これからは私の世界を一人で、深く味わいつつ生きてゆきたいと願った。心通う友の待つ伊豆に永住する日をのぞみつつ、菊名の家の始末はゆっくりしながら……。

八十歳の誕生祝い

(二〇一〇)

自分が八十歳になる日など考えられなかったのだが、六月七日、とうとう満八十歳になってしまった。毎年お祝いの言葉をくれた母も亡くなり、今年も夫もいなくなって、誰も

私の誕生日など心にかけてくれる人はないと思っていたら、思いがけない傘寿のお祝いをしていたことにあった。

ちょうど前日に夫の埋骨式をすることになったので、その夕餐の途中から、私の傘寿のお祝い会に切り替えてくださったのだ。

「ではこれから……」と、司会の弟の声とともに「ハッピーバースデー」の合唱が始まると、明の次兄義也さんの孫、小学校一年生の次男坊が恭々しくバースデーケーキを捧げて現われ、つづいて三年生のお兄ちゃんが花束を、次には明の弟千尋さんの孫の三歳の坊やまでカードを持ってついでくる。

バースデーケーキの上の八本のローソクに火が灯され、一生に一度やってみたかった一息の吹き消しも成功。それぞれの家庭から心のこもったプレゼントをいただいた。いつもは夫と二人の誕生祝い。今年はこのなにくさんの、しかも可愛い子どもたちに囲まれての一生忘れ得ぬ感激の誕生日であった。

そして第二のサプライズは、ケーキのホイップクリームが、実は真っ白いカーネーションが敷き詰められたお花のケーキだったこと。家に帰って明と一緒に長く楽しめるようにとの、みなさんの優しい心配りだったのだ。

夫は無類の本好きであった。結婚した頃も書棚には大分本が並んでいたが、東京に移って都市の仕事をするようになるると専門書も加わり、そのうえ好奇心旺盛なので、歴史、経済、文学、芸術、宗教や世界の情勢、日本各地の動向、はては宇宙や星座まで、まことに幅広いジャンルの本が増えていった。

書店や古書店の前を通れば必ずのぞいて、そのたびに二、三冊は買ってくる。最後はアマゾンでもよく注文をしていた。そのため自宅の書斎には到底収まらず、マンションの同じ階の3LDKを「研究室兼書庫」として使っていた。部屋の壁はすべて書棚で埋まっていた。

夫は全部処分してよいと言いつつ残したのだが、これをどうしたらよいものか思案に暮れていると、このたび、横浜市史資料室から、本もスライドもスケッチブックも全部引き取って分類整理し、市民にも貸し出せるようにすると有り難いお申し出があった。

研究室のおおよそ三万点の本と書類がトラック三台で運び出されたあと、夫が愛用して

いた大きな机や本棚も、「先生の遺品として大切にに使わせていただきたい」との希望が何人かの方からあり、引き取ってくださいました。

「絶版になったら手に入らなくなる」と、保存していた十数種の著作や資料も「まちづくり塾」の希望する方にさし上げることができた。望外のよろこびと感激している。

この一年

(二〇一〇)

夫の入院に始まり、ついに旅立ち。それにつづく日々のなんと足早に過ぎていったこの一年。かずかずの役所や銀行、公共機関の手続き、遺言による相続や税金、郵便物の処理など、聞きしにまさる煩雑な対応も十二月になってようやく収まってきた。それに加えて、私には『句文集 枝垂桜』の出版や発送も重なった。

嬉しかったのは、夫が新設して初代から代表をつづけてきた「自治体学会」への遺贈を基金として、「田村明まちづくり賞」を新設してくださったこと。来夏の大会に向けて、さっそく賞の選考に入るそうだ。

また、少人数の人間教育をしている山形の「基督教独立学園高等学校」と、島根の「キ

リスト教愛真高等学校」の創立二十五周年の校舎建て替え記念行事に寄付させていただいたこと。

そして、夫の著作や蔵書が横浜市史資料室に収められて、市民のために少しお役に立てられることなどである。

研究室を手放す手続きもようやく二日前に終わって、やっと二月の最終日、夫の介護以来ずっと苦しんできた私の心臓の精密検査の予約をいただくことができた。夫が生前お世話になっていた信頼するK先生に。

夫亡きあと、力弱き私一人の力でどうなることかと案じていたが、すべて最も良い方に導かれ実現してゆくことに、人智を超えた恩寵に感謝するばかりである。

「田村明さんの背骨」

(二〇一)

私の心臓の検査結果が特に今のところ心配なしと出たので、未曾有の東日本大震災に心を痛めつつ、昨日、ようやく三か月ぶりに、伊豆の「我が家」にたどり着いた。すがすが

しい春の自然につつまれた伊豆ヘルス・ケアマンションの中で、あたたかく迎えてくれた友人たちに囲まれ、温泉につかると、心も体も安らかにほぐれていくのが感じられた。

そこへ今日は、夫の葬儀の司式をしてくださり、「偲ぶ会」のメインとしてスピーチをしてくださった成澤光氏の原稿「田村明さんの背骨」が載った学術誌が届いた。

「田村明の精神的基軸の第一は、既成の権威や権力に対する批判精神。第二は弱者への視点。第三は使命としての職業観である」として、「それを育んだ田村の父母、信じていた内村鑑三の無教会キリスト教、そして神が自分に与えられた使命としての仕事は何なのかを問い続けたことである」とあった。

それはまさに、田村が召されたとき、その生涯の意味をみなさまにわかっていたかたいた願っていた私の願い、祈りそのものであったので感謝に溢れた。その本質を見透し深めてくださる成澤氏の慧眼に改めて敬意を表し、その全文をご紹介できないことを残念に思う。

田村明まちづくり賞

(二〇一)

十月九日、自治体学会の大会で、「田村明まちづくり賞」の第一回表彰式が行われた。昨年、田村の遺贈を基金として学会賞が新設され、論文賞と並んで、まちづくりの実践面で活躍のあった個人または団体に賞が贈られることとなった。

第一回は、ここ二十年余り活動をつづけてきた「赤煉瓦倶楽部舞鶴」の「地域資源を活かした舞鶴のまちづくり」が受賞した。

この活動は、横浜のみなとみらいの赤レンガ倉庫と関係が深く、舞鶴のまちを活性化しようと考えた舞鶴市の職員が、横浜独自のまちづくりに感銘し、中でも壊すことになってきた古い赤レンガ倉庫を市民の活動に活用する手法を見習って、舞鶴に明治時代からある赤煉瓦の建物を「赤れんが博物館」「市政記念館」「赤れんがパーク」として開設。そこでジャズイベント等に発展させていった業績を称え、今後の活動を励ますこととなった。

この賞が、これからの日本のまちを少しでもよいものにするための励みになってくれることを、天に在る夫の思いとともに心から願っている。



伊豆の折々



は描いていたというモネの苦心が、つぎつぎと静かに展開されていた。

この「一の間」につづいて、もう一部屋、同じように大きな「二の間」には、柳の木のあいだからあたかも四季の変化を思わせる四面の池と睡蓮が繰りひろげられていた。

これは、ここできしか味わえないのだ、と心に言い聞かせつつ、秘められたモネの情熱を、あの静謐な雰囲気ですべて味わった、至福のひとつときであった。

『斎藤宗次郎・孫佳與子との往復書簡』の出版

(二〇一三)

私にとって、この夏の大きな出来事は、京都在住の妹佳與子かよこが、『斎藤宗次郎・孫佳與子との往復書簡——空襲と疎開のはざままで』（見玉実英編）を教文館から出版したことである。

五人姉妹の末っ子の妹は、姉妹の中でも最も活発で、まだ終戦まもない昭和二十六年、お茶の水高等学校三年のとき、米国の『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン紙』主催の「世界ユースフォーラム」に、日本代表に選ばれてただ一人渡米し、世界の青年たちと世界平和などについて討議した経験がある。東京大学卒業後、米国のスミス大学でMAを取得、結婚して京都在住後は、関西の大学でアメリカ文化論や女性学などを教えていた。



紅梢



二人の息子を育て、論文や本を書き、お舅お姑さんに仕え、超多忙な生活をしていたが、七年前突然倒れて大動脈の十八時間に及ぶ手術を受けた。幸い手術は成功して生還したが、今は京都西賀茂の施設で車椅子の生活をしている。

米国留学中に知り合って結婚した夫は英文学者で、同志社女子大学の学長を二期つとめ、叙勲も受けた人だが、実際にできた人で、勢いの強い妻の手綱を上手にとりつつ、今は「夫の鑑」といわれるほど献身的な介護をしてくださっている。今回の出版も、彼の周到な準備なしには実現し得なかったと、感謝でいっぱいである。



『斎藤宗次郎・孫佳與子との往復書簡——空襲と疎開のはざままで』
(見玉実英編 教文館 2013年)

昭和十九年夏、第二次世界大戦が烈しさを増した頃、小学校五年だった妹佳與子は、杉並第二国民学校の三年から六年の生徒とともに信州の上田に集団疎開をした。親元を離れ食料も不足する中、寂しい思いをするであろう末っ子の孫娘に、祖父宗次郎は百余通の

はがきや手紙を送っている。

それは実に愛のこもったもので、家族の近況はもとより、イエス様が常に共におられる、正直、親切であれ、忍耐、祈り、謙遜、希望など、みずからの信仰から溢れ出る教えや願いを絵入りで伝えている。

それに対して佳興子も週一度の手紙を書いているが、ゆきとどいてあたたかい先生方、寮母さん、友人たちに恵まれ、戦時中の不安な、腹ペコな生活の中を実に明るくけなげに生きている様子に心打たれる。「私は元氣ピンピンです」が口癖で、文章は子どもらしい率直さとユーモアの中にも、孤児になることを覚悟しつつ、次の時代を背負う心意気までも。終戦後帰宅した妹は、今までの末っ子の甘えが消え、急にしっかりと成長したその姿に驚いたことを思い出す。

終戦後これだけ時を経ての出版は、とも考えられたが、山折哲雄氏に推薦をいただき、武田清子先生も書評に、「宗次郎を中心とする家族全体が、神様に守られているという安心感、すべてを善意で受け止め感謝する心が一貫してすがすがしい」と書いてくださった。そして、「貴重な記録を残してくださった」と喜ぶ声もつきつき寄せられた。

遺していただいたもの

(二〇一五・二〇一七)

ついに私も来年は八十五歳という年齢としになってしまい、遺言書とというものをしっかり書いておかねばならない身となった。

夫が遺した財産は、夫がどのような一生を生き抜いたのかを、記録、研究、まとめることに使っていただけ、それが日本のまちづくりを進めることに少しでもお役に立つなら嬉しいことであるし、私自身が実家から相続しているものは、祖父斎藤宗次郎の恩師、内村鑑三先生の未発表記録の出版や、無教会関係の二つの高校への寄付などに役立てたい。

自分の遺言書をつくりながら、ふと思いついた。私がこの世とお別れしたあとより、今、生きているときに甥や姪たちに「何かやりたいと思っていることに使って！」と、まとまった金額をプレゼントしたら楽しいことが起きるのではないかと。甥や姪には遺産を要求する権利がないと弁護士から聞いていたので、さっそくこの案を手紙にしてそれぞれに送った。

一番に返事が返ってきたのは、いちばん上の姉黎子の一人娘で、私が後見人をお願いしている祐子である。彼女は昨年、練馬の桜台に新居を構えたところだったが、音楽をやっているのので、新しいブランドピアノに買い替えて、弾くたびに「まこおばちゃん」のことを思い出すわね、と言ってくれた。

二番目の姉頌々子の一人息子守雄は、一家で伊豆の私に会いに来る旅行を計画してくれた。義兄が九州大学で教えていたので福岡住まいだが、守雄誕生の折、姉が体をこわしたため、生後一年間、実家で暮らした。守雄の首の斜頸を治すために、私が姉に代わって彼をおんぶして新宿の病院まで週二回通った思い出のある甥だ。守雄はICUを卒業後、比国、米国留学中に国際結婚したので、その娘美矢子とは十五年ぶりの再会である。彼女は米国の大学で医師になる勉強中である。

昼食は「うなぎ屋」を予約し、夜は近くの上等なホテルで日本の夏を味わってもらい、夢のような一日だった。

「それでは、あなただったら何に使う？」と聞かれれば、はてと。

夫と一緒に旅行したかったところは果てしなくあるけれど、「一度は行ってみたほうが

いいよ」と言われながらついでに行くチャンスを外したニューヨーク。ワシントンのポトマック河畔の満開の桜。秋の北米ニューヨークの燃えるような紅葉。そして、帰りがけにナイアガラの滝にも寄ってこようかしら。

夫や親から遺していただいた精神的なものは非常に大きいのだが、今、遺された「もの」をどのように使わせていただいたらよいか、考えさせられている。

『今、田村明を読む』

(二〇一六)

四月三日、神奈川県民ホールで、シンポジウム「田村明からのメッセージ」が開催され、都市プランナーとしての田村の真価をもっともよく理解してくださっている蓑原敬氏と廣瀬良一氏に講演していただくことができた。蓑原氏は「横浜の都市計画を、日本で唯一、世界標準の高みに引き上げた人」と評してくださいました。

また、『今、田村明を読む 田村明著作選集』を編集してくださいました横浜市立大学教授の鈴木伸治氏が、その出版の経緯と概要をお話してくださいました。

田村が単行本として発表した以外の、雑誌・新聞等に表した三百余りの論考の中から、

田村眞生子 略歴

- 一九三〇年（昭和5）六月七日、東京に生まれる（旧姓・斎藤）。
一九五一年三月、東京女子大学外国語科卒業。
卒業後、杉並区の中学校で英語を教える。
一九六〇年三月二十五日、田村明（一九二六年生まれ）と結婚。
一九六五年、草月流「いけばな」を義母田村忠子に習う。
その後、草月流一級師範顧問として、横浜地方裁判所などで二〇〇八年まで教える。
二〇〇〇年（平成12）、俳画・俳句を学び始める。
二〇〇一年、「天為」にて俳句を学ぶ。
二〇〇四年、「あけび句会」に入会。和田知子先生に学ぶ。
二〇一〇年、夫と死別。『句文集 枝垂桜』上梓。
二〇一五年、「NPO法人 田村明記念・まちづくり研究会」設立に協力。
二〇一六年四月三日、前記研究会主催によるシンポジウム「田村明からのメッセージ」に出席、挨拶。
四月、伊豆に転居。
二〇一八年、祖父斎藤宗次郎の旧著『聴講五年 晩年の内村鑑三に接して』を復刻監修。
二〇二一年（令和3）、『句文集 鉄線花』上梓。

〈現住所〉〒41310302 静岡県賀茂郡東伊豆町奈良本1405

伊豆ヘルス・ケアマンションA501

電話 055712214320

句文集 鉄線花

二〇二一年六月七日 発行

著者 田村眞生子

発行所 五十音

東京都杉並区久我山二一五一〇

編集制作 原 洋子（五十音）

校正 川平いつ子

印刷 精興社（担当…小山成一）

製本 松岳社